たい、 この次男として生まれました。一九一〇年(明治二十五年)年七月八日、 本の次男として生まれました。一九一〇年(明治二十五年)年七月八日、 な(現・一関第一高等学校)を卒業、同年、早稲田大学文学部予科 に入学した。 早稲田大学在学中、洋画、彫刻、工芸史の勉学に専念しました。 早稲田大学在学中、洋画、彫刻、工芸史の勉学に専念しました。	空うし常ししそフパ「か襲って結にてたのラ美近た森をうい婚幅も。間ン術代わロ
	フ パ 「 ラ 美 近 ン 術 代
森口多里(本名多利)は一八九二年(明治二十五年)年七月八日、	その間
水沢町大町(現・奥州市)で金物商を営む父森口伊三郎、母カネヨ	した。
の次男として生まれました。一九一〇年(明治四十三年)一関中学	しても
校(現・一関第一高等学校)を卒業、同年、早稲田大学文学部予科	常に幅
に入学した。	結婚
早稲田大学在学中、洋画、彫刻、工芸史の勉学に専念しました。	してい
恩師佐藤功一より美術品の調査を頼まれた。森口は日本画の大家やまえし	空龍を
華族、財閥、旧家などを訪問し、収蔵されていた名品を堪能した。	で森口
その経験は彼の美術眼に影響を与えた。また、日夏耿之助の主宰す	ランス
る同人誌『假面』同人となり、文芸活動にいそしんだ。	した。
一九一四年(大正三年)三月、早稲田大学文学部英文科を卒業し	黒沢
美術評論活動に入った。当時はヨーロッパ美術の受け入れ時期だっ	どの伝
た。ヨーロッパ美術を学ぶことが中心で、まだ日本には専門の美術	当たり
評論家は皆無に近い状態だった。	ために

その言言第目しとと言えてとて決心した。希
こ、そりまま郎里にしごまることを決して。除っまそれかりしょうない思した。そのままの里にしてまることを決していた。
たりこして残念こ思った。そのため云流芸能などの調査と呆存の
の伝統芸能を捨てて、現代的な踊りにばかり目を向けるのを目のでなどうけいのう
黒沢尻町(現・北上市)に疎開した森口は、地域の人々が神楽な
te
ンス留学から持ち帰った美術資料なども一緒に焼け、森口は落胆
森口の家は焼かれてしまった。家財や多くの文献・研究資料・フ
襲を受けるようになった。一九四五年(昭和二十年)五月の空襲
ていた。しかし、太平洋戦争が激しくなり、連日のように東京は
結婚後、東京に住んでいた森口は、評論、著作活動を盛んに展開
に幅が広かった。
ても民俗学研究や民芸運動などの形で関わり、その活動領域は非
た。また、美術史学研究も手がけた。さらに、日本在来の美に対
の間に農民童話『黄金の馬』や『ローマ文化と建築』などを出版
ランス・イタリア・スペインなどの美術と建築について研究し、
美術を紹介した。また、パリのソルボンヌ大学文学部に留学し、
近代美術一二講」『恐怖のムンク』などの著書で最新のヨーロッ
たわら『ミレー評伝』の翻訳や『異端の画家』『美を味わうご』
森口は早稲田大学理工学部建築科講師となり、工芸史を担当する

精力的に北上地域を調査した。また、この時期には花巻に疎開してせいますとき
いた高村光太郎との親交もあった。文化ホールでの講演会には高村
光太郎も招待され、森口の講演を聞いている。
森口が岩手の民俗の調査研究で気をつけたことは、「客観的に見
る。」ということであった。「自分の生まれた、あるいは育った土地
でも、客観的に、つまり異国人になってものを見つめ、考えたもの
でなければ勝ちのある郷土誌とはいえない。私はこれを基本態度と
して岩手の山村を歩き、そして本を書いた。」と記している。
その後、深沢省三や舟越保武らと共に岩手美術研究所を設立した。
戦後の岩手の美術教育・活動の原点となるこの研究所は、一九四八
年(昭和二十三年)岩手県立工芸美術学校として設置される。森口
は初代校長に就任した。森口はこの美術学校で美術論を講ずるとと
もに、ヴィーナス祭を催し、卒業証書を一人一人手渡すなど、自由
な気風を創り出した。
さらに県立盛岡短期大学美術工芸科の校長・科長、岩手大学特設
美術科教授(退職後は講師)、を務めた。また県文化財専門委員と
して民俗芸能や民俗資料の保存調査に力を注いだ。民衆の中に息づ
く民俗芸能や食生活・風習を取りまとめ多くの著書を出版しました。
その際、収集した蔵書や研究資料は岩手県に寄贈され、県立博物館

ように、森口は、岩手の人たちを愛し、岩手の風習や民俗きなどは、味けない思いをするに違いない」とも述べてい	森口は、「地域の行事や風習は素朴で暖かみがあるものだ」と記とである。	『岩手県民俗芸能誌』『岩手年中行事』などを執筆 出版した。『美術八十年史』『西洋美術史上下巻』『鑑賞教育』『民俗の四季』	しゅうぞう
化賞、一九六七年日和三十八年)岩	賞、一九六七年(昭和四十二年)勲四等瑞宝章、一世、中国、田子子(昭和四十二年)勲四等瑞宝章、一部三十八年)岩手日報文化賞、一九六五年(昭和四十八年)岩手日報文化賞、一九六五年(昭和四十八年)岩手日報文化賞、一九六五年(昭和四十二年)勲の時代はそれらのことが消えつつあ	作業やきまた。	作賞、一九六七年(昭和四十二年)勲四等瑞宝章、一九八代賞、一九六七年(昭和四十二年)勲四等瑞宝章、一九六乙年(昭和四十年)二年,四次市史常に、「北京市史民俗編」の編集委員などを歴任した。そこらに、「水沢市史関連の深い著書は、「町の民俗」「民俗の四季特に、水沢市と関連の深い著書は、「町の民俗」「民俗の四季味がない。しかし今の時代はそれらのことが消えつつあり、一ている。しかし今の時代はそれらのことが消えつつあり、一ている。しかし今の時代はそれらのことが消えつつあり、一ている。しかし今の時代はそれらのことが消えつつあり、一ている。しかし今の時代はそれらのことが消えつつあり、一ている。しかし今の時代はそれらの二年前の風習や民俗をきなどは、味けない思いをするに違いない」とも述べていたように、森口は、岩手の人たちを愛し、岩手の風習や民俗をしてきた人であった。
多くの研究が認められ、数々の賞を受賞している。一してきた人てあった。	研究が認められ、数々の賞を受賞している。一九六も消えつつある」と悲しんでいた。「子どもたちは、味けない思いをするに違いない」とも述べていた、森口は、岩手の人たちを愛し、岩手の風習や民俗さた人であった。	多くの研究が認められ、数々の賞を受賞している。一九六 味みぞう。 である。 である。 である。 しかし今の時代はそれらのことが消えつつあり、 漫画にかじりついていて、自分の生まれ育った土地に結びつ おいても消えつつある」と悲しんでいた。「子どもたちはテ きなどは、味けない思いをするに違いない」とも述べていた きなどは、味けない思いをするに違いない」とも述べていた きなどは、味けない思いをするに違いない」とも述べていた にまた人であった。	くの研究が認められ、数々の賞を受賞している。一九六くの研究が認められ、数々の賞を受賞している。一九六できた人であった。
	うに、森口は、岩手の人たちを愛し、岩手の風習や民俗さなどは、味けない思いをするに違いない」とも述べていたこ「子どもたちはこいて、自分の生まれ育った土地に結びいいる。しかし今の時代はそれらのことが消えつつあり、	★****** ★******* ★****** ★****** ★****** ★****** ★****** ★****** ★****** ★****** ★****** ★****** ★****** ★****** ★****** ★******* ★******* ★****** ★******* ★********* ★*********** ★************ ★************************************	ように、森口は、岩手の人たちを愛し、岩手の風習や民俗を ように、森口は、岩手の人たちを愛し、岩手の風習や民俗を などを執筆出した。そ まなどは、味けない思いをするに違いない」とも述べていた などを執筆出版した。 それいても消えつつある」と悲しんでいた。「子どもたちはテ である。 である。 である。 である。 しかし今の時代はそれらのことが消えつつあり、一 でかる。しかし今の時代はそれらのことが消えつつあり、一 ない思い出をもてなくなってきているが、将来と地を離れて真 い思い出をもてなくなってきているが、将来と地を離れて真 した。 したの たちを愛し、岩手の風習や民俗の四季 などを執筆出版した。 そ などした。 そ した。 である。 である。 しかし今の時代はそれらのことが消えつつあり、一 ないこれていた。 「子どもたちはテ などで、 なってきているが、 が来と地を離れて真 なってきているが、 が来と地を離れて真 なってきている。 した。 である。 した。 である。 した。 である。 した。 である。 しかし今の時代はそれらのことが消えつつあり、一 でたちはテ なってきているが、 将来と地を離れて真 した。 なってきているが、 が来ためを離れて真 なってきている。 した。 である した。 である。 である。 でする。 でのる。 でする。 でのる。 でする。 でる。 でする。 でする。 でする。 でする。 でする。 でする。 でする。 でする。 でのる。 でのる。 でのる。 でのる。 でのる。 での。 でのる。 での。 での。 でののの。 での。 でのののののののののののののの
	いても消えつつある」と悲しんでいた。「子どもたちはこいる。しかし今の時代はそれらのことが消えつつあり、	おいても消えつつある」と悲しんでいた。「子どもたちはテである。 森口は、「地域の行事や風習は素朴で暖かみがあるものだ」 森口は、「地域の行事や風習は素朴で暖かみがあるものだ」 蘇民祭調査報告書』『水沢市史第六巻民俗編』『高野長英頌野特に、水沢市と関連の深い著書は、『町の民俗』『民俗の四季	おいても消えつつある」と悲しんでいた。「子どもたちはテキに、水沢市史関連の深い著書は、『町の民俗』『高野長英頌野特に、水沢市と関連の深い著書は、『町の民俗』『高野長英頌野特に、水沢市と関連の深い著書は、『町の民俗』『高野長英頌野である。 である。 である。 である。 である。 である。
出をもてなくなってきているが、将来と地を離れてかじりついていて、自分の生まれ育った土地に結び		森口は、「地域の行事や風習は素朴で暖かみがあるものだ」である。 それとい たれない、 なんでい なんでい なんでい なんでい なんでい なんでい である。 しょう たれた である。 しょう たれた に、水沢市と関連の深い著書は、『町の民俗』『高野長英頌野	森口は、「地域の行事や風習は素朴で暖かみがあるものだ」ならに、『水沢市史民俗編』の編集委員などを歴任した。それなどで、「水沢市史民俗編』の編集委員などを歴任した。それなどで、「水沢市史民俗編』の編集委員などを歴任した。それないる。
い思い出をもてなくなってきているが、将来と地を離れて草浸画にかじりついていて、自分の生まれ育った土地に結びつている。しかし今の時代はそれらのことが消えつつあり、一森口は、「地域の行事や風習は素朴で暖かみがあるものだ」である。			「行事』などを執筆 出版した。」「下巻』『鑑賞教育』『民俗の四番「編集委員などを歴任した。その
美術八十年史』『西洋美術史上下巻』『鑑賞教育』『民俗の四 それで、水沢市と関連の深い著書は、『町の民俗』『高野長英頌野 である。 ている。しかし今の時代はそれらのことが消えつつあり、一 である。 である。 である。 しかし今の時代はそれらのことが消えつつあり、一 である。 である」と悲しんでいた。「子どもたちはテ である。 しかし今の時代はそれらのことが消えつつあり、一 である。 しかし今の時代はそれらのことが消えつつあり、一 である。 しかし今の時代はそれらのことが消えつつあり、一 である。 しかし今の時代はそれらのことが消えつつあり、一 である。 しかし今の時代はそれらのことが消えつつあり、一 である。 しかし今の時代はそれらのことが消えつつあり、一	『高野長英頌歌』『民俗の四季』『民俗の四季』		

盛岡市上田の自宅にて九十一歳の生涯を閉じ、北上市の染黒寺に葬

られた。

*参考文献

『森口多里 その足跡を辿る』

岩手大学アートフォーラム『水沢市史』

水沢市

県立美術工芸学校校長時代(美工会『ミューズの花びら』より)

